

メインシナリオ／グランド第3回
『あなたのための希望のうた 第3話』 個別リアクション

『夜の訪問』

深夜、あづまはアンセル・アリングムの家を訪ねた。
彼女の訪問は突然のものであったため、ランプを持ってドアを開けた向こうにその顔を見た時は、戸惑いと驚きを隠せなかった。
あづまは申し訳なさそうに言った。
「こんな時間に男性のお部屋を訪ねるなんて、ずい分はしたくない女だと思っていらっしゃるでしょうね？」
「あ……いえ、あなたはそんな浅はかではないでしょう。でも、確かにこんな遅くに何かあったのですか？」
「少し、お話ししたいことがあります……」
言葉のニュアンスから、人のいるところでは話せないから、店が終わってから訪ねてきたのだろうとアンセルは考えた。
そして短い話でもなさそうだと察した彼は、部屋にあづまを導いた。
アンセルははじめワインボトルに手を伸ばしたが、すぐに考え直して湯を沸かし出した。
彼が入れたハーブティーを一口飲んだ後、あづまは話を切り出した。
「どうしても、気になることがあります」
「どのようなことですか？」
「あなたのことです……」
時間帯やセリフだけだと違うことを考えてしまいそうだが、あづまにそのような気配はないし、アンセルも彼女がそういう人物だとは思っていない。
どういうことか、という疑問を視線に乗せた。
「不思議に思ったのは、伯爵のところへ町の人達について行った時です。あの時の伯爵には疑わしい言動は見られませんでした。ですが、あなたはとても強い不信感を抱いているように見えました」
「……」
「あたしの勝手な推測ですが、あなたは過去に伯爵と何かあったのではありませんか？」
アシルがアンセルを見て「どこかで会ったような」と呟いたことが、あづまにこう思わせた。そしてそこから、考えられるのは。
「アンセル・アリングムというのは、本当のお名前でしょうか？」
アンセルは静かな表情のままだが、やがて小さくため息を吐いた。
「女将さんは、よく見ていらっしゃる……。確かに私は伯爵と面識があります。だいぶ前のことですが」
アンセルは軽く目を伏せると、懐かしむように続ける。
「私には、娘がいました。——せっかくですから、ご忠告を」
声を落とし、アンセルは言った。
「伯爵は、放置するのが癖のようです。あなたもどうかお気を付けください」
「それは、どういう意味でしょうか？」
「伯爵を信用してはならないという意味です」
あづまはもっと詳しくその根拠を聞きたかったのだが、アンセルはこれ以上話す気はなさそうだった。
「家まで送りましょう」
あまりしつこく聞くこともできず、あづまはこの日は素直に送られることにした。
答えてもらえなかった質問と残った疑問を、抱えたまま。

こちらのリアクションは以下の人物に発行されています。
岩神あづま